

信頼を求めて誠実に

——人間の半生を描く作品群を読む——

鈴木 初江

南吉との出会い

私が南吉と出会ったのは、小学校三年生のときでした。担任の先生から貸していただいた南吉の童話集を夢中で読み、涙が止まりませんでした。その日の記憶が、なぜかくっきりと残ったのです。なぜ、それほどまでに惹かれたのか分かりませんが、以来、南吉はずっと私の中にありました。今考えると、幼いながら、「人と人が分かり合える難しさ」、「真を尽くすことの美しさ大切さ」に、おぼろげながら触れたのかと思います。

小学校の教員になり給料で買った初めての高価な本が、大日本図書『新美南吉童話全集三巻』でした。函に入ったそれは宝物になり、引越しのたび、いつも真っ先に特等席に収まってきました。紙面には、その時々の手垢と染みと、私の溜息や希望が混じり合って、開けば四十数年の時間がふわりと広がります。

近年は読み語りボランティアとして、南吉作品のいくつ

かを読み聞かせしてきました。今回、時代を視野に、もう一度読み深める機会をいただき嬉しく思っています。私に与えられた視点から、代表作『おじいさんのランプ』について感じたことを述べ、続いて、他の何編かに触れたいと思います。

巳之助を救った誠実さ

『おじいさんのランプ』は、おじいさん（巳之助）が孫の東一君に語る形で書かれています。

日露戦争の頃、岩滑新田の村に巳之助というみなし子が、使い走りなどをして村においてもらっていました。自分の暗い村にランプという文明の利器を売って、生活を明るくしてやろうという希望を持ち、ランプ屋として成功しています。

ここまで、一人の少年の姿と誠実な商売のやり方が丁寧に語られています。少年ながら、自立した暮らしを熱望し、勇気をもって粘り強く交渉する姿。商売のための工夫と根